にほんきんだいおんがく　きそ　つく
日本近代音楽の基礎を作った

しも　おさ　かん　いち
下總 皖一

自筆譜「かくれんぼ」

1898〜1962

下總皖一　年譜

1898年(明治31年)	0歳	3月31日、埼玉県原道村(現・加須市)に父吉之丞、母ふさの二男として生まれる。覚三と名付けられる。
1912年(明治45年)	14歳	栗橋尋常高等小学校を卒業。
1917年(大正　6年)	19歳	埼玉師範学校本科一部を卒業。(現・埼玉大学)
1920年(大正　9年)	22歳	東京音楽学校を1番で卒業。(現・東京芸術大学) 長岡女子師範学校の先生になる。
1921年(大正10年)	23歳	飯尾千代子と結婚。 県立秋田高等女学校、秋田県師範学校付属小学校の先生になる。
1924年(大正13年)	26歳	栃木師範学校の先生になる。千代子夫人が病気がちのため伸枝と名前を変えたのと時期を同じくして、覚三改め「皖一」とする。 本格的に作曲に取り組む。
1927年(昭和　2年)	29歳	東京牛込喜久井町に引っ越しをする。
1932年(昭和　7年)	34歳	文部省(現・文部科学省)研究員として、作曲法の研究のためにドイツへ行く。ベルリンの国立ホッホシューレに入学。パウル・ヒンデミット教授に教えを受ける。 **♪「スキー」「ほたる」「電車ごっこ」を作曲。**
1934年(昭和　9年)	36歳	ドイツでの2年の留学生活を終えて帰国。 東京音楽学校の先生になる。
1935年(昭和10年)	37歳	**♪「三味線協奏曲」を作曲　★「和声学」を書く。**
1938年(昭和13年)	40歳	**♪「箏独奏のためのソナタ」を作曲　★「作曲法」を書く。**
1940年(昭和15年)	42歳	文部省教科書編集委員となる。 **♪「花火」「たなばたさま」「野菊」を作曲。**
1941年(昭和16年)	43歳	品川区上大崎に引っ越しをする。
1944年(昭和19年)	46歳	**★「日本音階の話」を書く。**
1950年(昭和25年)	52歳	**♪「下總皖一混声合唱曲集10巻」の出版が始まる。**
1955年(昭和30年)	57歳	文部省教科調査委員となる。
1956年(昭和31年)	58歳	東京芸術大学音楽学部長となる。
1959年(昭和34年)	61歳	東京芸術大学音楽学部長を辞める。亡くなるまで同大学の先生として授業をする。
1962年(昭和37年)	64歳	7月8日、永眠。

子どもの頃

子どもの頃の皖一は、(本名を覚三といったのですが)やせっぽっちで、弟と双子かと思われるくらいでした。

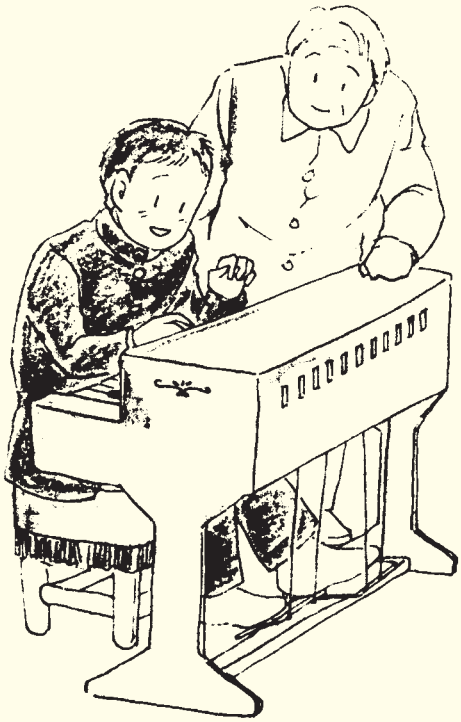
しかし、埼玉県原道村(現・加須市)の利根川近くの家のまわりの田んぼや小川のあたりで、元気よく遊びまわっていました。

このように美しく変化する自然の中で遊んだ思い出が、「音楽の心の源」となったに違いありません。

学校に通っていた頃

高等小学校へ行っていた時、初めてオルガンを弾いてもよいと言われ、指でピポピポと音を出してみますと、その音の美しさに、すっかり夢中になってしまいました。

これが、皖一が音楽の道へ進む出発点であったのかもしれません。



大人になってから

皖一は、埼玉師範学校（先生になるための学校）から東京音楽学校（今の東京芸術大学）へ進み、卒業の時には成績が1番でした。努力をおしまない人でした。

それから、作曲も本格的に力を入れ、34さいになった時、文部省（今の文部科学省）からドイツへの留学を命ぜられ、有名な先生から指導を受けました。

日本へ帰ってからも美しく心に染みいるたくさんの曲を作るとともに、音楽の仕組みを解き明かす「和声学」という本を書きました。ドイツの先生からも大変ほめられたその本は今でも日本で使われています。

東京芸術大学の先生も長くつとめ、優れた音楽家をたくさん育てました。

作曲家

音楽理論家

音楽教育家

みかん好きで有名

旅行の時は「作曲ノート」と「みかん」を決して忘れなかったそうです。

時には、みかんを20個も持っていき、みんなにすすめ自分でもとてもおいしそうに食べました。

芸大の学生がみかん狩りの旅行を企画した時は、喜んで参加したそうです。

ガッチャン!

とても几帳面な生活ぶりでした。

時間には厳しく、遅刻は許さなかったそうです。

芸大の教授時代に学生たちから「ガッチャン」というあだ名をつけられています。

あだ名の由来は、授業のベルが鳴ると文字通りドアを「ガッチャン!」と閉めたからだったかもしれませんね。

農業への深い思い…

日記には天候と、野菜の栽培・収穫の記録が事細かに書いてあります。

カボチャ・エンドー豆・ソラ豆・白菜・ホウレン草・カラシ菜・タカ菜・ソバ・玉ねぎ・カブなど、農家顔負けです。

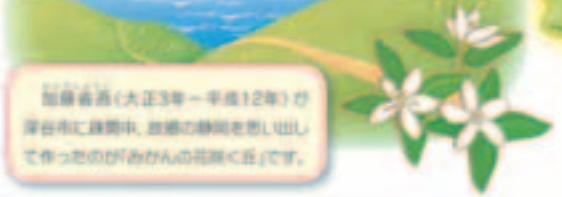
手間のかかる農作業が、芸大の仕事が忙しい時期に盛んに行われていることに驚きます。

協力：中島 睦雄（文章・監修）、中島 由起子（イラスト）、加須市教育委員会（写真）

埼玉県ゆかりの童謡

♪みかんの花咲く丘

みかんの花が咲いている
思い出の道　丘の道
はるかに見える　青い海
お船がとおく　かすんでる



加藤省吾（大正3年～平成12年）が深谷市に疎開中、故郷の静岡を思い出して作ったのが「みかんの花咲く丘」です。

♪たなばたさま

ささのはさらさら
のきばにゆれる
お星さまきらきら
きんぎん すなご

加須市（旧大利根町）生まれの下總院一（明治31年～昭和37年）は、「たなばたさま」「かくれんぼ」など数多くの童謡を作曲しました。

♪とおりゃんせ

とおりゃんせ　とおりゃんせ
ここはどこの細道じゃ
天神さまの細道じゃ
ちょっととおしてくだしゃんせ…

夢に出てくる天神さまは、川越市の三芳野神社だと言われています。

♪靴が鳴る

お手つないで　野道を行けば
みんな可愛い　小鳥になって
唄をうたえば　靴が鳴る
晴れたみ空に　靴が鳴る

和光市に住んでいた清水かつら（明治31年～昭和26年）は、武蔵野の雑木林をイメージして「靴が鳴る」「咲られて」を作詞したと言われています。

♪来山子

山田の中の一本足のかかし
天気のよいのにみの笠つけて…

さいたま市に生まれた武笠三（明治34年～昭和44年）は、見沼田んぼをイメージして「来山子」を作詞したと言われています。

JASRAC　出1007510-001